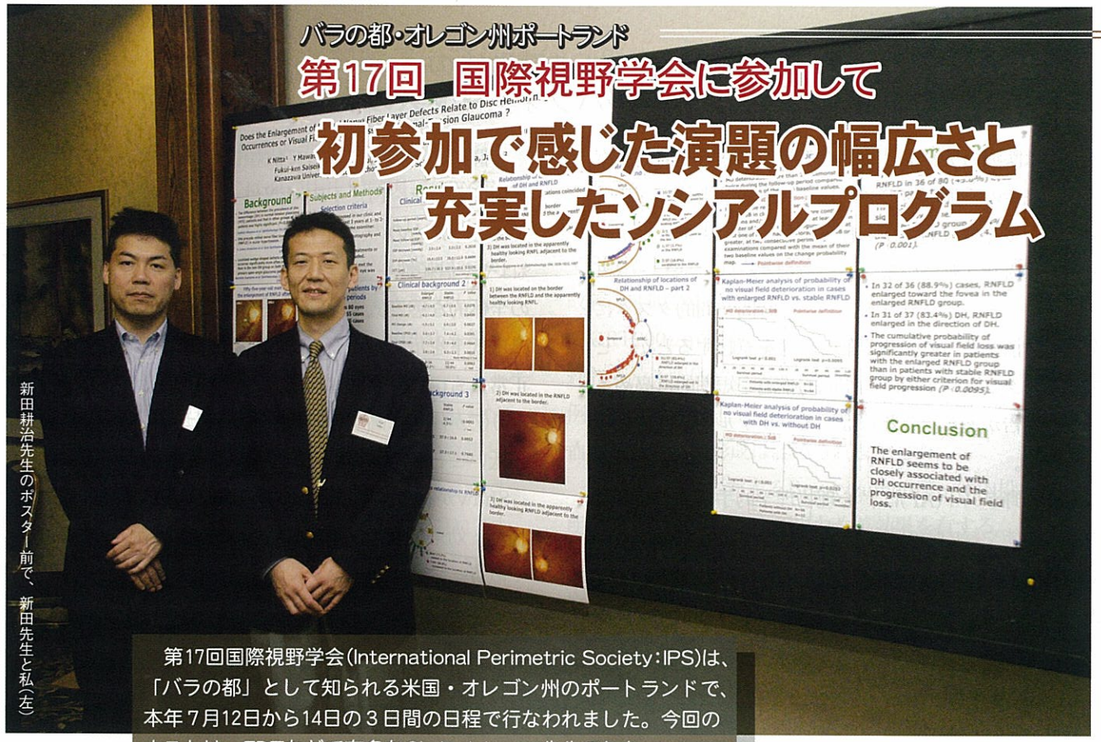
バラの都・オレゴン州ポートランド

第17回　国際視野学会に参加して

初参加で感じた演題の幅広さと充実したソシアルプログラム



新田耕治先生のポスター前で、新田先生と私（左）

第17回国際視野学会（International Perimetric Society：IPS）は、「バラの都」として知られる米国・オレゴン州のポートランドで、本年7月12日から14日の3日間の日程で行なわれました。今回のホストは、FDTなどで有名なChris Johnson先生でした。

国際視野学会の報告は毎回、常連の先生方が書いておられますが、今年は、初参加させていただいた私が国際視野学会初心者の目で見た学会について報告させていただきます。

金沢大学
大久保（おおくぼ）　真司（しんじ）
（医学系研究科内講師）

オレゴン州ポートランド

ポートランドは自然の豊かさと都市の機能性が調和した町です。

4ドルの1日乗車券で、バス、MAXライトレイル（鉄道）、ポートランドストリートカーが乗り放題で、さらに、ダウンタウン内は料金無料ゾーンであり、非常に公共交通機関が整っている観光客に優しい町です。町の人も非常に親切で、もたもたと地図を見ていると、必ず誰かが声をかけてくれて、乗り物の乗り方や道を教えてくれます。

またオレゴンは、カキなどの海の幸やサーモンなどの川の幸をはじめオーガニック野菜や「オレゴン産の牛」など、豊富な食材に恵まれた土地です。地ビールの生産も盛んな土地柄で、人口に対してのブリュワリー数は全米でいちばん多いそうです。

IPSの特徴

IPSの最大の特徴は、臨床の面から視野にかかわるOphthalmologistと、心理物理学など視野の基礎的な面から研究を行なっているPhDが一同に会し、ひとつの会場でアットホームな雰囲気ながら、十分に時間をとって議論を行なうことです。

講演は10分間の発表と5分間の議論の時間があり、ポスター展示でも一般講演の合間に3分間の発表と2分間の議論の時間があって、ひとつの会場で、すべての演題を聞くことができます。また、各セッションのあとには20分から30分ほどのコーヒーブレークがあり、コーヒーを飲んで頭をすっきりさせ、ポスターを見ながら、あるいは質疑応答の時間だけでは足りなかった人たちが集まって非常に熱心な議論が行なわれています。

一般的に最近の学会は演題数も多くなったためか、ひとつの研究分野の学会でも複数会場で行なわれ、すべての演題を聞くことができません。また、日本の臨眼などの大きな学会では、興味のある演題の講演が同一時間に行なわれていることもあります。それに対してIPSは、ひとつの会場で、とことん議論しようという意図が感じられます。

学会トピックス

特別講演は、Rarebit perimetryでも有名なLars Frisén先生が、"Reclaim the Periphery"というタイトルで、周辺視野の重要性と、どのような方法で測定するのかを講演されました。Rarebit perimetryは、周辺視野測定においても周辺の受容野が重ならないので、有効な手段のひとつのようです。ただ現在、小さい視標の視野に興味を持っているわれわれとしては、もう少しRarebit perimetryの話が聞けると、うれしかったのですが…。

一般演題は全部で69題あり、正直、心理物理学的な演題の中には、恐らく日本語で聞いても理解できないような演題もありました。しかし、視野に関して、基礎から視野障害による運転の問題などの非常に臨床的な話題まで、本当に幅広い発表がありました。また、学会名は国際視野学会ですが、本学会は"17th Visual Field and Imaging Symposium"でもあり、画像解析と視野の関係を解析した演題も非常に多く、私が想像していたより、視神経乳頭などの画像解析が中心の演題も多くみられました。そして、緑内障をやっていると、視野といえば緑内障の演題が大半を占めるのかと勝手に思っていましたが、基礎分野のみならず臨床面でも、緑内障や神経眼科分野だけでなく黄斑部疾患関連の演題も多くみられました。

現在、日本でも世界でもプロスペクティブスタディーのデータの信頼性が高く、重要視される傾向にあります。視野進行に関して非常に興味をひかれたのは、長期でプロスペクティブスタディーに参加した群に比べて、プロスペクティブスタディーに参加しなかった群が4倍も視野の進行確率が高いという報告です。その理由として、プロスペクティブスタディーに参加する群は治療に関心が高く、治療に対するコンプライアンスが高いことが挙げられていました。長期の視野進行のプロスペクティブスタディーの結果は、非参加群の視野進行の程度を過少評価している可能性があり、われわれ臨床家は、このことを頭に入れ、治療のコンプライアンスを上げる努力をしなければならないと思いました。

また、ハンフリー視野計で、通常のⅢの視標サイズではなくⅤの視標サイズを用いることによって、バラツキを抑え、再現性を高めることが報告されていました。近畿大学助教授の松本長太先生や川崎医療福祉大学教授の可児一孝先生が考えられている、視標を小さくすることによって感度を上げるという考えとは対照的でした。この点に関しては、松本先生もロビーでディスカッションされていたようです。

今回、日本からも多くの先生方が講演されました（表）。全69演題中、実に13題を占め、松本先生と多治見市民病院部長の岩瀬愛子先生は座長も務められました。

ほかにも日本からは、可児一孝教授ご夫妻、米田剛先生、大学生の丹沢さん（川崎医療福祉大学）、吉川啓司先生（東京都町田市・吉川眼科ク

Devers Eye Instituteのラボのポスター前で、
岩瀬愛子先生と金沢大学グループ
後列左より、馬渡嘉郎先生、杉山和久教授
前列左より、新田耕治先生、中谷雄介先生、私、石井浩統先生

表

井上立州先生（東京都渋谷区・オリンピア眼科病院）
Central mean sensitivity and non-penetrating trabeculectomy

橋本茂樹先生（近畿大学）
A new approach to automated kinetic perimetry

前田史篤先生（川崎医療福祉大学）
Pupil perimetry in glaucoma

奥山幸子先生（近畿大学講師）
Characteristics of the normal values for flicker perimetry with the Octopus 300 perimeter

松本長太先生（近畿大学助教授）
Correlation of the structural and functional changes in the early and preperimetric stages of glaucoma

藤田京子先生（日本大学）
Relationship between fixation status evaluated with SLO microperimetry and critical print size before and after photodynamic therapy

有村英子先生（近畿大学）
Correlation of M-charts™ and PHT™ findings with subjective perception of metamorphopsia in patients with macular diseases

飯島裕幸先生（山梨大学教授）
Automated static perimetry in eyes with central serous chorioretinopathy

山崎芳夫先生（日本大学助教授）
The relationship between lowering intraocular pressure and prognostic factors for progression of visual field damage in patients with normal tension glaucoma

野本裕貴先生（近畿大学）
Detectability of glaucomatous changes using SAP, FDT, SWAP, Flicker perimetry and OCT

新田耕治先生（福井市・福井県済生会病院医長）
Dose the enlargement of retinal nerve fiber layer defects relate to disc hemorrhage occurrences or visual field loss progression in normal-tension glaucoma?

小暮諭先生（山梨大学講師）
Comparison of Frequency doubling technology perimetry, Off-perimetry and On-perimetry in eyes with glaucoma

鈴木尚人氏（Nidek）
Research on the application of optic nerve fiber map fundus perimetry

リニック院長）、木村泰朗先生（東京都台東区・上野眼科医院院長）、鈴村弘隆先生（東京医療生活協同組合中野総合病院部長）、高橋現一郎先生（東京慈恵会医科大学附属青戸病院部長）、中野匡先生（東京慈恵会医科大学講師）、井上洋一先生ご夫妻（東京都渋谷区・オリンピア眼科病院理事長）、丸山耕一先生（近畿大学講師）、東江さん（Zeiss）、杉山和久教授、大久保真司（金沢大学）、中谷雄介先生（富山県・氷見市民病院）、馬渡嘉郎先生（福井市・福井県済生会病院医長）、石井浩統先生（福井県済生会病院）が参加しました。

今回から、若手研究者のすばらしいプレゼンテーションに対して賞が贈られました。受賞者は、中国からロンドンに留学されていて、“Mapping measurements of the Retinal Nerve Fiber Layer to the visual field using a non-linear Bayesian neural network”を発表されたH. Zhou先生と、“Retinotopic organization of human Primary visual cortex correlates with the pattern of visual field thresholds”を発表されたHamilton Glaucoma CenterのRO. Duncan先生でした。

充実したソシアルプログラム

海外の比較的小さな専門的な学会の場合、学会期間中の講演のない時間に、観光や参加者の親睦を深めるためのソシアルプログラムが設けてあることが多いが、今回のIPSも非常に充実したソシアルプログラムが用意されていました。

学会前日（7月11日）のオープニングレセプション前には、Discoveries in Sightのラボ見学ツアーが行なわれました。その中に、杉山教授が留学されていたDevers Eye Instituteのラボもあり、15年以上も前の留学中に行なった仕事のポスターが貼ってありました。教授もすごく感激しておられました。ラボは非常に広いスペースがきれいに整頓され、様々な検査機器や実験道具が置かれて充実しており、非常にうらやましく思いました。

オープニングレセプションは、学会場からバスで移動し、観光名所となっているピトック邸を貸し切って行なわれました。そこは、オレゴン州最大の発行部数を誇る新聞「オレゴニアン」の創始者であるヘンリー・ルイス・ピトックが1914年に建て、家族11人と住んでいた大邸宅です。ポートランド市を見下ろす丘の上に建っており、最高の景色でした。建物内も家具や絵画が置かれており、あまりのいい雰囲気に会話も弾み、会場で振る舞われた地ビールやワインもおいしく、ついつい飲み過ぎた先生も多かったようです。この会が終わり、ホテルの部屋に着いたのは午後11時半頃でした。

学会初日（7月12日）は朝7時30分から夕方6時まで、みっちり学会がありましたが、2日目の午後にはコロンビア・ゴージツアーがあり、みんなでお弁当を持ってバスに乗り、ダムや滝を観光しました。その晩にはオプションでHampton Callawayのディナーショー（65ドル）が企画されていました。残念ながら、私たちは申し込むのが遅くて参加できませんでしたが、非常に良かったそうです。

最終日はバンケットが催されました。IPSのバンケットでは毎回、参加者が国別に分かれて歌を披露することがお決まりになっているそうです。自国の民族音楽や、視野計やSITAなど視野に関する用語や、OCT、HRT、GDxなどの検査機器をもじった替え歌などが披露されました。

私は、この学会は初めてでしたので知らなかったのですが、日本は毎回、趣向を凝らしたパフォーマンスで、注目されていたようでした。今回の日本は、木村先生の指揮で「上を向いて歩こう」を熱唱した後、日本の「二人ばおり」を披露しました。

まずは、近畿大学の先生がコミカルな二人ばおりで笑いをとりつつ、二人ばおりの説明をし、次にホストのJohnson先生にも挑戦してもらい、会場は大いに盛り上がりました。最後は、Johnson先生が“一●番”のハチマキをしたまま「上を向いて歩こう」を演奏してくださり、岩瀬先生が感謝のバラを贈呈されました。先生はハチマキを気に入ってくださったのか、閉会するまでずっとしたままでした。

各国の歌が終わった後は、Johnson先生がバンドの演奏で盛り上げてくださり、夜中の12時まで踊り続けました。次回学会長の松本先生も、その責任感からか、最後は踊りに参加され、近畿大学の先生方も「見たことがない」と言われるほどの弾けた踊りを披露されていました。

2008年は奈良で会いましょう。

今回のボードミーティングで、バイスプレジデントが岩瀬先生から松本先生に変わりました。岩瀬先生は山崎先生と共にボードメンバーには残られますが、「岩瀬先生、大役お疲れさまでした」。

次回は、バイスプレジデントの松本先生の近畿大学が主催で、日本の良さを伝えるべく、奈良で開催されます。ぜひ今回以上に、日本からも多くの先生方に参加していただき、学会を盛り上げたいものです。

（写真は可児一孝教授と東江さんから提供していただきました）

コロンビア・ゴージツアーにて
可児一孝教授と川崎医療福祉大学グループ

バルコニーにて

ピトック邸

オープニングレセプションで
左から木村泰朗先生、岩瀬愛子先生、吉川啓司先生

後列左より、丹沢さん、前田史篤先生、米田剛先生、小暮諭先生、飯島裕幸教授ご夫妻
前列、可児一孝教授ご夫妻

後列左より、中野匡先生、鈴村弘隆先生、高橋現一郎先生、東江さん
前列左より、山崎芳夫先生、吉川啓司先生、奥山幸子先生、木村泰朗先生

バンケット

「二人ばおり」に、やる気満々のChris Johnson先生。
準備をするのは左より、橋本茂樹先生、奥山幸子先生、丸山耕一先生。
ちなみに、ガッツポーズの手は有村英子先生

近畿大学グループ
左より、有村英子先生、野本裕貴先生、丸山耕一先生、橋本茂樹先生、松本長太先生

お気に入りのハチマキで、にこやかに演奏されるChris Johnson先生

次回開催地の奈良県をアピールされる松本長太先生